

JASO発 暮らしつづける街へ (Part 2) <第 12 回>

東北の今、東日本大震災第 17 次被災復興調査

宮城設計一級建築士事務所
宮城秋治

あの東日本大震災から 11 年が過ぎた 2022 年 5 月 1 日に JASO 第 17 次被災復興調査団 (安達和男団長以下、安達洋子、河野進、鯨井勇、鯨井佳子、江守英実、関公和、藤本加奈子、篠崎玲紀、三木剛、宮城秋治の合計 11 名) は宮城県から岩手県へと被災地に再び入った。コロナ禍により前回 2019 年の第 16 次調査から実に 3 年ぶりである。その間に被災地の復興事業は大きく進んで、土地の嵩上げや区画整理は完了し、高台への復興住宅の整備も終わって住民の帰還を待つばかりだ。さらに、東日本大震災の記憶を風化させないために震災遺構や慰霊施設等が整って公開されている。今回の調査の主眼に据えた対象である。

門脇小学校

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、大きな地震を感じた宮城県石巻市立門脇小学校の児童 218 名と教職員 25 名は訓練どおりに日和山へと避難した。南浜・門脇地区の住民は車で門脇小学校の校庭まで避難してきて大津波に襲われる。車同士がぶつかり合って火災が発生し、校舎は炎に包まれた。本校舎が津波火災の痕跡を残す唯一の震災遺構として、焼け残った屋内体育館と特別教室棟が展示館として一体的に整備されている。津波被害の威力と津波火災被害の凄惨さを実物を目の当たりにして感じ取ることができる。入館料は大人 600 円だが、施設の永きに渡る維持や震災遺構としての機能を果たすための最低限必要な費用だと思う。



写真 1 第 1 次調査の石巻市立門脇小学校 (2011 年 5 月 2 日)

写真 2 第 17 次調査の石巻市震災遺構門脇小学校
(2022 年 5 月 1 日)

500 名を超える方が犠牲となった南浜は石巻南浜津波復興祈念公園となり、円形の建物のみやぎ東日本大震災津波伝承館の最も高い屋根の高さが津波の高さを示している。



写真3 第17次調査の石巻南浜津波復興祈念公園と
みやぎ東日本大震災津波伝承館 (2022年5月1日)

旧女川交番

宮城県女川町はJASO第1次被災調査団が2011年5月2日に初めて被災地に入り津波被害というものを初めて目の当たりにした町だ。魚保冷倉庫から流されたサンマの腐敗臭のなかで、私たちがもっとも衝撃を受けたのが鉄筋コンクリート造の建物が津波で杭ごと引き抜かれ転倒している光景だった。その一つの旧女川交番は、鉄筋コンクリート造2階建てで、1980(昭和55)年に建てられたものであり、1階が執務室、2階が休憩室として使用されていた。東日本大震災における津波により海中に没した旧女川交番は、引き波により基礎部分の杭が引き抜かれ、現在の位置に横倒しになったものと考えられている。建物には、漂流物がぶつかって壊れたものと思われる跡が見られるほか、漂流物などの残骸もそのままの状態で見捨てられている。旧女川交番を震災遺構として保存することが決まり、どのように公開していくのか注目していた。不安定な構築物を長年にわたり安全に伝えていくには配慮を要する。周りの土地が嵩上げされて旧女川交番は埋没している状態にある。それを利用してスロープを回廊させながら古い地盤面に向かって下りながらかなり接近してかつ安全に見ることができる設計だ。引き抜かれて折れた杭や漂流物による建物の損傷など当時のまま残されている。さらに地面からと屋上面から自然に生えた植物が旧女川交番を覆い始めている。やがて緑に埋没するかもしれない。遠い将来にわたり津波の被害を語り継ぐ貴重な震災遺構となった。



写真4 第5次調査の旧女川交番 (2011年11月3日)
沈下した地盤面に横たわっている。



写真5 第11次調査の旧女川交番 (2014年4月28日)
周辺の土地の嵩上げが進み排水暗渠が敷設されている。



写真6 第15次調査の女川町 (2018年5月1日)
女川駅やシーバルピア女川・ハマテラスがオープン。



写真7 第17次調査の旧女川交番 (2022年5月1日)
女川町東日本大震災遺構旧女川交番。



写真9 第17次調査の旧女川交番 (2022年5月1日)
スロープを回廊しながら震災遺構旧女川交番を一周する。



写真8 第17次調査の女川駅・女川温泉ゆぼっぼ
(2018年5月1日)



写真10 第17次調査の旧女川交番 (2022年5月1日)
自然に繁茂した緑が震災遺構旧女川交番を覆い始めている。

大川小学校

ここに佇んでいると北上川と山の意識しかなく海への存在は想像することもできない。津波は北上川と陸から襲ってきた。高さ8.6mもの津波が大川小学校をのみこんで児童74名と教職員10名が犠牲となった。石巻市は、この事象と教訓を伝え続けるために大川小学校を震災遺構として残し、大川震災伝承館を併設した。いのちについて考える場所となった。小さな命を考える活動は今も続いている。



写真11 第10次調査の大川小学校 (2013年1月31日)



写真 12 第 17 次調査の石巻市震災遺構大川小学校
(2022 年 5 月 1 日)



写真 14 第 17 次調査の民間震災遺構高野会館
(2022 年 5 月 1 日)

さらに南三陸町に入って高野会館と防災対策庁舎を視察した。南三陸町には 16.5 m の大津波が襲った。高野会館では高齢者芸能発表会が開かれていてその出席者と近隣住民と従業員の 327 名と犬 2 匹の命を救っている。南三陸町庁舎にいた職員や近隣住民は防災対策庁舎の屋上に避難したが 43 名が犠牲となっている。周辺は大きく嵩上げされて南三陸町震災復興祈念公園として整備された。防災対策庁舎は志津川の巨大な防潮堤に埋まるようにひっそりと佇んでいる。



写真 15 第 7 次調査の南三陸町防災対策庁舎
(2022 年 5 月 2 日)



写真 13 第 1 次調査の高野会館 (2011 年 5 月 3 日)



写真 16 第 17 次調査の南三陸町震災復興祈念公園と
防災対策庁舎 (2022 年 5 月 1 日)

陸前高田

高台移転のために山を崩し壮大なベルトコンベアーで中心部の嵩上げを図ってきた陸前高田も整備が完了した。海沿いの気仙中学校、奇跡の一本松、陸前高田ユースホステル、旧道の駅高田松原、下宿定住促進住宅が震災伝承施設として残されて防潮林としての高田松原の再生とともに高田松原津波復興祈念公園が国営追悼祈念施設として整備された。



写真 17 第 5 次調査の旧道の駅高田松原
(2011 年 11 月 4 日)



写真 18 第 11 次調査の陸前高田
今泉地区の山を切り崩し高田地区へ土を運ぶ
ベルトコンベアー (2014 年 4 月 29 日)



写真 19 第 17 次調査の震災伝承施設奇跡の一本松
(2022 年 5 月 2 日)



写真 20 第 17 次調査の震災伝承施設陸前高田ユースホステル
(2022 年 5 月 2 日)



写真 21 第 17 次調査の東日本大震災津波伝承館いわて
TSUNAMI メモリアル (2022 年 5 月 5 日)

鵜住居 (うのすまい)

釜石市の鵜住居地区防災センターは、大震災のほぼ1年前、2010年2月に開所した鉄筋コンクリート造り2階建ての「拠点避難所」であった(標高4.3m、最寄りの海岸線までの距離約1.2km)。東日本大震災の大津波襲来で、多数の市民が同防災センターに避難した。しかし津波は同センター2階天井付近にまで達し、69名が犠牲となった。

鵜住居駅前エリアは「うのすまい・トモス」として東日本大震災の記憶や教訓を将来に伝えるとともに、生きることの大切さや素晴らしさを感じられ、憩い親しめる場となっている。鵜住居地区防災センターがあった場所には跡地碑があり、慰霊碑、津波高さ11mを表すモニュメント、防災市民憲章碑とともに釜石祈りのパークとなった。

震災遺構の役割

今回の第17次被災復興調査では、宮城県石巻市震災遺構大川小学校・女川震災伝承館や、岩手県釜石市鵜住居地区防災センター跡地に建てられた釜石祈りのパークなど、東日本大震災の津波による犠牲者を慰霊し追悼する施設も数多く視察した。日本ではこれからも地震と津波が繰り返される。明日来るかもしれないし、数十年後あるいは数百年後かもしれない。いかに犠牲を少なくできるのか、建物が命を守れるのか、避難の重要性と避難困難者の対応などまだまだ考えていく課題がある。震災



写真22 第10次調査の鵜住居地区防災センター
(2013年2月1日)



写真23 第17次調査のうのすまい・トモス釜石祈りのパーク
(2022年5月2日)

遺構が被災地と全国の人々を繋ぎ、みんなの問題として継承していく役割は大きい。あらためて被災地復興調査の継続を心がけてゆきたい。